

琉球大学学術リポジトリ

家族関係の修復における「家族が立っている描画」 の変化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2009-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平田, 幹夫, Hirata, Mikio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9670

家族関係の修復における「家族が立っている描画」の変化

平 田 幹 夫

A Change of “Standing Family Drawings” in The Family-Related Restoration

Mikio HIRATA

本研究では、「家族が立っている描画」が家族関係のアセスメントとして活用できるかを事例をとおして検討を行った。本事例は、両親の不仲により家族関係がうまく機能しなくなったと訴えた大学生A子が、定期的に両親にA子の学生生活の肯定的な情報を携帯メールで伝える取り組みを1年6ヶ月間行った結果、両親の仲が良くなり、家族関係の修復が見られた事例である。また、A子が1回目の面接で描いた「家族が立っている描画」と1年6ヶ月後に行った3回目の面接で描いた描画を比較検討した結果、家族関係の修復が描画においても表出していることが示唆された。

キーワード： 家族が立っている描画, 携帯メール, 家族関係

I. はじめに

描画は言語的表現を必要としないため、描き手の無意識的な葛藤や言葉にならない感情がイメージとして表現され、検査者も描き手のイメージをありのままに理解することが可能である(馬場, 2005)。描画者が家族をどのように認知しているかをアセスメントするものに家族描画法がある。

家族描画法の教示の仕方は、研究者によって若干異なっている。Harris (1963) は、「あなたの家族全員の絵を描いて下さい」という教示を行っている。一方、高橋 (2008) は、「『私の家族』という題で絵を描いて下さい」という教示で家族画を実施している。その理由として、

家族画テストを実施する目的が、クライアントの家族成員に対する認知や家族関係の力動を知るためであり、家族間に問題がある場合に用いることが多いので、直接「あなたの家族を描いて下さい」と教示するよりは、防衛が働かないことをあげている。家族画の教示が、「あなたの家族全員の絵を描いて下さい」や「『私の家族』という題で絵を描いて下さい」のいずれにおいても、杉浦・香月・鋤柄 (2006) が指摘しているように、家族画は、家族員が横一列に並び記念写真的な並列画、静止画的な描画になりやすい。しかし、家族画の中には動的家族画に近い絵を描く場合もよくある。それは、家族画の教示に曖昧さがあるからである。

* 琉球大学教育学部

そこで、次のような教示の提案を行いたい。「あなたも含めて家族全員が立っているところの絵を描いてください。家族全員を描き終えた後に、頭の上の余白の部分に、描いた順番を数字で書き、数字の側に誰を描いたのかを書いて下さい。その際は、父、母、兄、姉、弟、妹、自分という表現を使って下さい。

例えば、兄が2名いる場合は、一番上の兄を兄(1)とし、2番目の兄を兄(2)、一番上の弟を弟(1)、2番目の弟を弟(2)と書いて下さい。姉、妹の場合も同じです。

漫画風に描いたり、棒人間では描かないで下さい。絵は、ボールペンで描いて下さい。鉛筆等で下書きをすることはできません。」という教示をおこなう。このような教示のもとで行われる家族画をここでは、「家族が立っている描画」Standing Family Drawings (以後 SFD とする) とする。

SFD では、家族を描いた順番、人物の大きさ、家族成員間の距離、目、眉、口、耳、手、足の描き方、洋服の描き方等の特徴を多様な視点からとらえることができたならば、描画者が家族関係を、どのように認知しているのかをアセスメントすることができると思う。

SFD の解釈においては、描画者に描画を語らせることが必要である。描画を解釈する際には、描画者の語りを含めたあらゆる視点から解釈しなければならない。

そこで、本研究においては、両親の仲が悪くなったことによって、家族機能がうまく働かなくなった事例を取り上げる。家族機能が働かなくなると、家族成員間のコミュニケーションが取りにくくなり、口をきかなくなったり、ちょっとしたことで口論になりやすい。新藤・相模・田中(2002)は、母子の心理的距離が近づけば、父子の心理的距離が近づき、それに伴って、父母の心理的距離が近づくと述べている。

本事例においては、家族成員間のコミュニケーションの促進を図る方法として、携帯電話のメールを活用することにした。子どもが積極的に両親に携帯メールを通してコミュニケーションを図ると、子どもと父親の心理的距離、子どもと

母親の心理的距離が縮まり、その結果両親の心理的距離が縮まり、家族機能が回復するであろうと考えた。

本研究では、一事例を通して家族機能の変化が、SFD の変化としてどのように表れるのかを検討することを目的とする。

II. 事例の概要

1. クライアント (以下 A 子)

大学2年生女子

2. 主 訴

両親の仲が悪くことが常に気になって、大学での勉強があまり手につかない。両親は些細なことで喧嘩をすると、口をきかない状態が長く続く。そのような時に母親から電話がくる。弟は両親の関係をあまり気にしていない。両親に仲良くしてもらいたい。

3. 家族構成

父：会社員 (40代)

母：パート勤め (40代)

A 子：学生 (21歳)

弟：学生 (19歳)

4. 問題の経過

A 子が高校3年の時に、父親はこれまで勤めていた会社を、家族に何の相談もなしに辞めてしまった。その事がきっかけで母親は、父親に不信感を抱くようになり、些細なことで父親と喧嘩をすることが多くなった。父親が会社を辞める前までは、両親は特別仲が良いというわけではないが、喧嘩をすることはあまりなかった。その後、父親は就職するが、母親との関係はぎくしゃくしたまま、関係が修復することはなかった。

A 子は、そのような両親の姿を見るのが嫌で県外の大学に進学した。A 子が実家に帰るのも年に1回程度であった。母親は、父親との間にトラブルがあると、A 子に頻りに電話をしてきた。日々、課題提出に追われていた A 子は母親からの電話に疲れていた。

この状況をどうにかしたいということで、著者の講義を受講していたA子が相談に来た。

Ⅲ. 面接の経過

【第1回面接：200X年6月】

1. A子が語る家族

父が家族に何の相談もせずに退職したことで、両親は些細なことでよく喧嘩をするようになった。父は口数が少なく、思っていることを家族にはっきりと言わない。

父は、1年半前に転職した。新しい職場で慣れないこともあり、父も大変だったと思う。それは理解しないといけないと思う。でも、転職する前に家族に相談して欲しかった。父は家族には何も相談しないのに、自分のことをもっと理解して欲しいと言うのは理解できない。

両親は、必要最低限の会話しかなく、家庭内別居に近い状態である。母は、最近、父を怖がっている。父と話すときや父が近くにいるとき、通常の声量が出ないこともある。このままでは母が壊れてしまいそうで怖い。母には母の人生がある。母は、子どものためだけに働き生きてきた。母のことを考えると息が詰まる。父の母への接し方は許せない。

今の状態は両親にとってお互いに不幸である。母が望むのであれば離婚してもいい。

帰省した際に、一瞬でも両親が仲良くしているときは嬉しかった。この状態が長く続けばいいのと思った。

母とは、お互いに何でも話せる関係である。弟とは、用事があるときに話す程度だったが、大学2年生の夏休みに帰省した際、両親のひどい状態を弟と一緒に目の前で見たのをきっかけに、弟と家族のことを話せるようになった。父とは、話そうという気になれない。父には、家族の気持ちをもっとわかって欲しい。

弟は、反抗期の時期もあったが、最近母の

気持ちを察して声をかけたりする。

父と弟は、男同士であるにもかかわらず、しっかりした信頼関係はない。弟は、父に母へもつと優しく接して欲しいと言葉で伝えたこともある。両親の間にはさまれている弟はつらいだろうと思う。弟も、「疲れる」とこぼしていた。

2. SFDの実施

A子の家族関係を描画によってアセスメントするために、SFDを実施した。

実施時期：200X年6月

調査用具：著者が作成した「家族（自分も描く）が立っているところを、絵で描いてみよう」の所定のA4用紙にボールペンで描かせる。ボールペンを使用するのは、描き直しをさせないためである。例えば、鉛筆を使用すると、最初に描いた描画の表情が怒っている場合に、笑顔に描き直すことが多々あるからである。これまでの著者の臨床知から、最初に描いたものが現実場面を投影している描画が多いことがわかっている。

教示：「あなたも含めて家族が立っているところを描いてください。家族全員を描き終えた後に、頭の上の余白の部分に、描いた順番を数字で書き、数字の側に誰を描いたのかを書いて下さい。その際、父、母、兄、姉、弟、妹、自分という表現を使って下さい。

例えば、兄が2名いる場合は、一番上の兄を兄(1)とし、2番目の兄を兄(2)、一番上の弟を弟(1)、2番目の弟を弟(2)と書いて下さい。姉、妹の場合も同じです。

漫画風に描いたり、棒人間では描かないで下さい。絵は、ボールペンで描いて下さい。鉛筆等で下書きをしてはいけません。」という教示をおこなった。

描画の実施時間：描画の実施時間は、20分程度であった

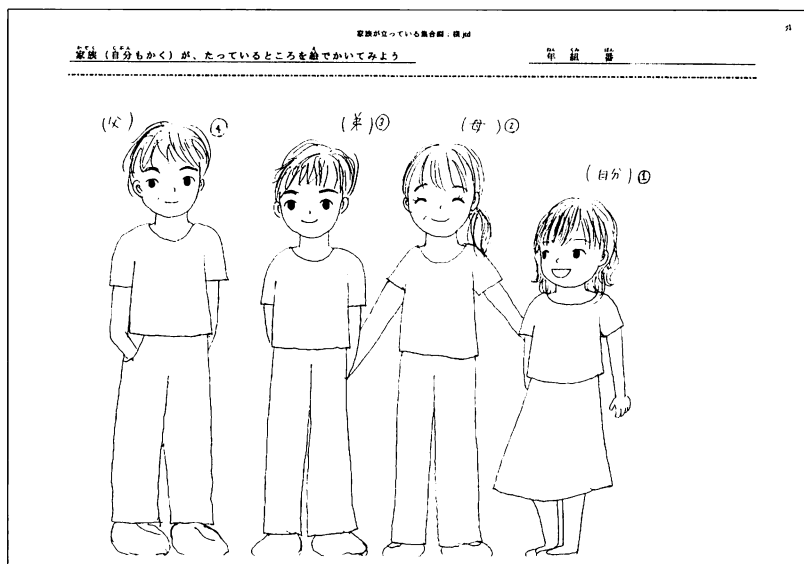


図1 200X年6月のSFD

3. A子のSFD(図1)の分析

(1) A子が描画から感じた語り

A子は図1のSFDを描き終えて、下記のような感想を述べた。

<全体的な印象>

家族を描いた順序は、①A子、②母、③弟、④父である。配置は、今、自分が身近に感じている順のような気がする。家族全体が笑みを浮かべているのは、現実の家族ではなく、うまくいった頃の家族を表現したかも知れないと語った。

<各自に対する印象>

①A子について

自分だけがなぜ、家族側を向いて、口を開いて笑っているのかびっくりした。家族のことを気にしていることが表現されているかもしれない。最近、あきらめ気味だが、本当は、家族みんなに仲良くして欲しいという気持ちの表れかも知れない。

②母親について

父との関係の中で、何とか耐えて頑張っている母に、笑顔でいて欲しいという願望が母を笑顔で描いたかもしれない。母が子ども二人に手を当てているのは、母が私と弟をサポートしようと頑張ってくれているので、そのように描い

た。母親の目が閉じている状態が、今の母のイメージであったため、目を開けている母を描きたくはなかった。

③弟について

弟は笑っているが、家の中で我慢しているところがあって、実際は絵よりは暗い表情をしている。

④父親について

父の描き方は他の家族成員に比べて雑になってしまった。口は口角を上げなかった。父に対して良い感情は持っていない。描いている時も、早く描き終えてしまいたかった。顔の表情は嫌な雰囲気にも見え、見方によっては優しくも見えて、妙な感じがある。

父がポケットに手を入れている姿は、家族に歩み寄ってくれない姿勢を無意識に表現したかも知れない。

4. SFD(図1)の描画特徴

<全体的特徴>

全員が笑顔で描かれ、仲のいい家族に見えるが、A子は家族全員を見ているかのように描かれている。また、父親だけがズボンのポケットに手を入れ、他の家族との心理的距離を感じさせる。

<家族成員の特徴>

① A子

A子は笑顔であるが、顔も身体も家族の方を向き、口を開いて家族に何かを語りかけているように感じられる。目は両目とも家族側を見ている。口は大きく開き笑顔で何かを家族に語りかけているように見える。A子の右側の腕だけが指まで描かれ、左側の腕はまっすぐ伸び、腰のあたりまで伸びている。足は両足とも家族側を向いている。スカートの下部分が家族側に引っ張られるように描かれている。

② 母親

顔も身体も正面を向き、笑顔である。母親だけが、閉じた目で描かれ他の家族成員と違っている。母親だけまつ毛が描かれ、目を閉じて、口角を上げ微笑んでいる。左側の口元にほうれい線（A子の説明では年齢線）が描かれている。年齢線は、母親の方が父親より長く描かれている。

母親の右側の腕はA子の腰のあたりに伸び、左側の腕は、弟の右側の手を握っているかのように感じられる。左側の足は弟と父親の方を向き、右側の足は、A子の方を向いて描かれている。

③ 弟

顔も身体も正面を向いていて、笑顔である。目は両目とも開き正面を向いている。口は、口角を上げ微笑んでいる。右側の腕は、左側の腕よりまっすぐ伸び、母親が手を握っているように描かれている。父親側の左側の手は、後ろに引くように描かれている。右側の足は、母親とA子の方を向き、左側の足は、父親の方を向いている。

④ 父親

顔は、右側に立っている家族成員を向いているように見えるが、両目とも、左側に寄っていて、家族の反対側を向いている。他の家族との心理的距離を感じさせる。口は直線的で微妙に微笑んでいるように描かれている。顔の左側に年齢を表すためのほうれい線（A子の説明）がある。左右の手はズボンのポケットに入れている。足は、両足とも右側の家族の方を向いている。

家族のことが気になるが、素直に自分の気持ちを伝えることができない父親の葛藤が描画に表出しているように感じられる。

5. 見立てと方針

一人暮らしをしている弟が、両親の関係を改善することに関わることは期待できない。A子は県外にいて、年に一回程度しか帰省しないので、両親の間を取り持つことができない。

母親は、A子に父親のことで電話やメールで相談することがあったが、弟には相談することがない限り、お互いに連絡を取ることはなかった。A子は父親の携帯メールアドレスを知っていたが、メールをしたことは殆どなく、帰省したときに話す程度であった。父親と話すことに対して、かなりの抵抗があった。しかし、このままでは両親の関係が更に悪くなることも理解していた。A子自身、自分が両親の間を取り持たなければならないことは理解しているが、「具体的にどうしたらいいかわからない」と訴えた。

A子の語りやSFD（図1）より、父親が家族の中で孤立していることが明らかになったので、A子と父親との心的距離を最初に縮めることが必要であると考えた。

以上のことより、本事例の家族機能を修復するには、A子が母親との関係を更に密にするのではなく、父親との関係を密にする努力をすることが大切である。そこで、A子に次のような提案をおこなった。

- ・父親のことが大好きだった子どもの頃を思い出して、父親に手紙を書くこと。
- ・1週間に少なくとも1回、両親に同じメールを送ること。
- ・両親に送るメールは、大学生活のこと、友人のこと、感動したこと、食事のことなどを中心として、楽しい内容や嬉しかったことを書き、できるだけ写真も添付して送ること。
- ・両親の関係が良くなるという強い信念のもとで、1年間取り組み続けること。

A子は躊躇しながら「少しでも両親の関係を

良くなるのであれば、どんなことでもしたい」と提案を受け入れた。

【第2回の面接：(200X+1)年4月】

A子は第1回の面接直後より、「自分が変われば家族も変わっていく」かも知れないという期待を持つようになり、第1回の面接で指示された父への手紙や携帯メールのこと、そして、両親の様子について次のように語った。

1. 父への手紙

A子は、父親に書いた手紙について、次のように語った。

第1回の面接の3日後に、父に手紙を書いた。私にとっては嫌な作業だった。この時期は、まだ父に対して良い感情は持っていなかった。手紙を書くように指示されたので仕方なく書くことにした。しかし、手紙を書きながら様々なことを思い出し、涙が流れていた。嬉しいとか悲しいとか、そういう言葉では表現しにくい涙だった。小さい頃、よく絵を描いてくれた父は私の自慢の父だった。小学生の頃、父が毎週土曜日の昼食にチャーハンとラーメンを用意してくれたことなどが走馬燈のように蘇ってきた。これまでの父に対する自分の行動を振り返るうち、

自分にも問題があったことにも気付かされた。日頃から意地を張る性格の私にとっては心の重労働だったが、自分の「思い」を込めて父に手紙を書いた。手紙に対してメールで返事が来た。父からメールで返事が来たのは初めてだった。父親に、何か響くものがあったのかも知れないと思った。メールで母のことは触れられていなかった。

2. 両親とのメール

A子は、両親とのメールのやりとりについて、次のように語った。

これまでは母との結びつきが強く、父に対して、たわいないメールを送ることはなかった。初めは、「何でいちいち父親にメールをしなければいけないわけ」と抵抗しながらも両親の関係が良くなるのならという思いで、同じ内容のメールを両親に送ることを続けた。今では、両親にメールを同時送信することに何の違和感も感じなくなった。むしろ積極的に、両親に対して「たわいないメール」を送っている。父とは、写真のやりとりやクイズなど「くだらないメール」も多くするようになった。それは、私と父にとって楽しいものとなっている。以前、父が「俺はそんな話は聞いてない」ということで母と口論することもなくなった。

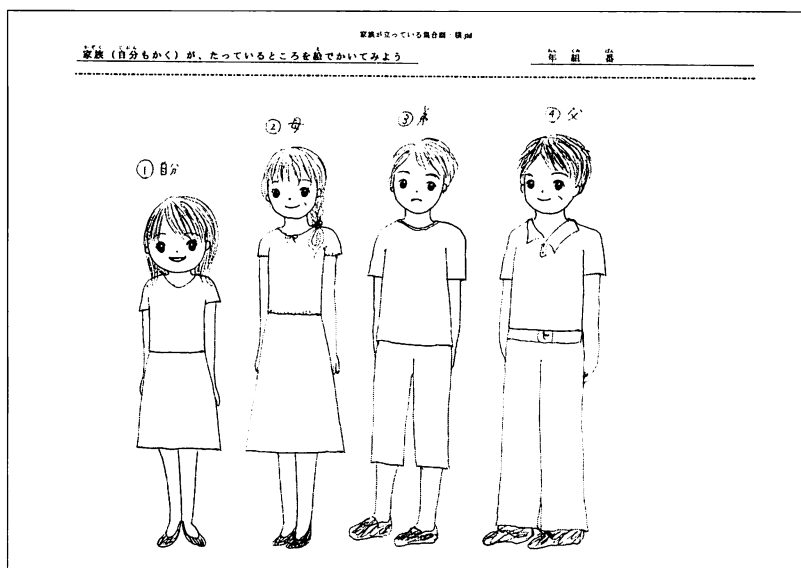


図2 (200X+1)年10月のSFD

3. 両親の関係

A子は、両親について次のように語った。

夏休みに帰省した際に、父にこれまでのことを謝った。両親の関係が以前に比べて良くなっていることを両親の会話を聞いていて実感した。両親と3人で東京ディズニーシーに行った。両親と一緒に遊びに行くことは、これまで想像もできなかった。これは、両親にとっても家族にとっても大きな進歩であった。しかし、全てがうまくいっているわけではない。両親は些細なことでよく喧嘩もするが、以前と比べると、母の父に対する愚痴がかなり減ってきた。

【第3回の面接：(200X+1)年10月】

A子の方から、その後の家族のことについて、報告したいという申し出があって面接が行われた。

1. 家族についての語り

A子は面接で次のようなことを語った。

1年半前に自分が書いた家族についての文章を読み、驚いた。両親についての記述に、「とても夫婦ではない二人」「別れてしまってもいい」「母が壊れてしまいそうで怖い」など、確かにそう感じていた時期があった。

家族のことを考えたり、振り返ることは、その当時の私にとって気持ちのいいものではなかった。「きっと良くなる、自分が変われば家族も変わっていく…」とはとうてい思えなかった。あきらめというより、投げやりな気持ちであったように思う。

私と母は、家族の中で一番の仲良しである。以前は「実家に戻って家族を(特に母を)支えよう、経済的にも助けなきゃ」と思っていた。しかし、今は殆ど心配していない。

弟は、以前に比べ両親と話をするようになった。最近、恋人との別れ、交通違反による処分など、あまりいいことがなかった。

父との関係は、この1年半で大きく変化した。以前は父の全ての行動・言動に苛立っていた。しかし、現在は、家庭や職場での父親の頑張りをお認めることができるようになった。自然に連絡を取り合い、笑いながら会話もできる。母と

弟は、よく話をするようになった。両親は、今でも時々喧嘩をするが、互いに関わり合いがやわらかくなった。以前は、お互いに口にするのがなかった「ごめん」という言葉がよく出るようになり、関係は大きく変化している。

2. SFDの実施

A子にSFDを実施した。描画時間は20分程度であった。A子は、図2のSFDを描き終えて、描画から感じたことを次のように語った。

<全体的印象>

家族を描いた順番は、SFD用紙の左側から①自分、②母親、③弟、④父である。今回は、「家族画をあまり描きたくない」という感情はなかった。むしろ一人一人を大事に描くような感覚があった。家族の間隔もほぼ均等になっていて、筆圧や線にも安定感があると自分では思う。服装などにも気を配り、それぞれのイメージを表現したいと思った。

<各自に対する印象>

① A子自身について

今回は自分自身を描く際、スムーズにいかなかった。進路のことで悩んでいることが影響したのかもしれない。

② 母親について

母は服装や表情など全てが変わった。母のイメージに合う、ニットの服を着させた。最近、母は自分自身に目を向けるゆとりがあるように感じられることから、リボンやスカートで私なりにその雰囲気表現してみた。

③ 弟について

弟は、以前に比べ両親と話をするようになった。最近、恋人との別れ、交通違反による処分など、あまりいいことがなかったので、困った表情の弟を描いたかもしれない。

④ 父親について

今回は、父に対して「嫌だ」と感じていた以前のような感情は無くなった。「仕事も頑張っているしね。襟付きの服着てる感じだな。ベルトとかして、ちゃんとしてたっけ」などと考えながら、「なんか丁寧に描いてあげたい」という思いが湧き起こる中で描いた。

3. SFD (図2) の描画的特徴

<全体的特徴>

A子は、SFD用紙の左側から①自分②母③弟④父の順で描き、全員が細やかに優しく描かれている。この順番は以前(図1)と同じであるが、描く位置が左右逆になっている。全員の目が開かれて描かれている。家族の隣同士の腕と腕の間の距離が同じくらいである。家族全員の靴が黒く塗りつぶされている。家族の中でA子のみ口を開いて笑みを浮かべている。弟だけが笑顔がなく困った表情をしている。

<家族成員の特徴>

① A子

顔も身体も正面を向いていて、笑顔である。

目は開いて描かれ、左側の目は、真正面を向き、右側の目は、やや右側(家族成員側)を向いているように感じられる。口は少し開けて笑っている。腕は、両手とも身体に沿って真っすぐ伸びている。足は、両足のかかとをつけて、左右に開き、安定感がある。靴は母親と同じように黒く塗られている。

② 母親

顔は正面を向き、身体は少し左側を向き、目は正面を向き、穏やかな表情をしている。

口は閉じて微笑んでいる。口元の右側には、ほうれい線(A子の説明では年齢線)が描かれ、図1のSFDとは逆の位置である。髪は三つ編みがされ、太めの布ゴム(A子の説明)で結ばれている。腕は、両手とも身体に沿って真っすぐ伸びている。右腕の方が左腕に比べ太く、手の指の一部が描かれている。足は、両足を閉じ、つま先を左側に向けている。

③ 弟

顔はやや父親側を向き、「へ」の字口で描かれ、怒っているのか、あるいは何かに不満を持っているように感じられる。

右側の目は右斜め方向を、左側の目は正面を見ているようにみえる。両手は共に身体に沿って真っすぐ伸びている。靴は父親と同じような描線で不十分に塗りつぶされて描かれている。両足は肩幅くらいに広げ、母親とA子の方を向いている。

A子によると、この時期は、恋人との別れ、交通違反による処分などがあり、あまりいいことがなかったようである。このことが描画に表出したと考えられる。

④ 父親

両目は正面を向き、顔と身体はやや左側の家族成員の方を向いている。口は閉笑口になっていて笑顔である。口元の右側にほうれい線(A子の説明では年齢線)が描かれている。図1のSFDではほうれい線は、母親の方が父親より長かった。図2のSFDでは、ほうれい線は、図1のSFDとは逆の位置で、長さは母親とほぼ同じ大きさで描かれている。両手とも身体に沿って真っすぐ伸びている。腕は右側の方が左に比べ太く、母親と同様に右側の手の一部の指が描かれている。

IV. 考察

本研究の考察を2つの視点から行いたい。

初めにA子の語りから家族機能の修復について考察をおこなう。次に、図1と図2のSFDを比較検討し、A子の認知している家族機能の変化がSFDの中に表出しているのかを考察していきたい。

1. 家族機能の修復

両親の関係が悪くなると、親子関係にも影響が出てくる。特に父親と子どもとの関係は悪くなりやすい。本事例においては、A子は常に母親の味方で、父親に対しては常に敵対心があった。父親に自分から話しかけることはほとんどなかった。しかし、A子が両親の関係修復を担う必要があった。そこで、A子と両親(特に父親)とのコミュニケーションを図る方法として携帯メールを使った。1年6ヶ月間の携帯メールでのコミュニケーションの結果、A子は、家族に次のような変化ができたと述べた。

- ・父親がA子からのメールを楽しみにするようになった。
- ・A子が両親にたわいないメールを積極的に送るようになったり、父親と写真のやりとりをするようになった。

- ・父親が子どもたちのことで「俺は、そんな話、聞いていない」と母親と口論になることがなくなかった。
- ・A子が帰省した際、父親にこれまでの自分の態度を謝ることができた。
- ・A子は、携帯メールで素直に自分の気持ちを父親に伝えることができるようになった。
- ・父親からの返信メールが頻繁に来るようになった。
- ・両親と3人で東京ディズニーシーに遊びに行った。両親と一緒に遊びに行くことは、これまでは想像もできなかった。
- ・両親は、現在でも時々喧嘩をするが、互いに関わり合いがやわらかくなっている。以前は、お互い口にすることがなかった『ごめん』という謝罪の言葉が出るようになった。このことがとても嬉しい。

両親にメールを同時に送る今回の1年6ヶ月に及ぶ継続的な取り組みは、家族機能の修復に携帯メールが大きな役割を果たした可能性があることが示唆された。

2. SFD (図1, 図2) の考察

著者が描画テストを実施する上での基本的な立場は、「描画には描き手の無意識的な葛藤や言葉にならない感情がイメージとして表現される」ということが前提である。

SFDに家族関係の修復がどのように表出しているのかを、初回面接で描いてもらった図1のSFDと1年6ヶ月後に描いてもらった図2のSFDを比較検討し、明らかにしていきたい。

初めに、図1と図2の全体的な特徴について述べたい。図1と図2のどちらも家族を描く順番は、①A子、②弟、③母、④父で、変わらなかった。しかし、図1では所定の用紙の右側から左側に順番に描かれているのに対して、図2では、反対の左側から右側へと順を追って描かれていた。人物を描く順番は、A子が家族の中で話しやすい順番と一致していた。このことは、加藤(1986)が、人物を描く順序でその順位は家族構成内における相対的な重要度を示すと述べていることとも一致する。

図1に比べて図2のSFDは、家族成員の洋服が細やかに描かれている。このことについてA子は、「家族一人ひとりを大事に描くようにした」と述べている。また、家族全員の靴も無色から黒く塗りつぶして描いている。家族成員間で服などを同一の色で塗ったりすることは、家族員を同一視し、家族員に対する親和の表現である(江幡・吉田, 2000)。靴が黒く塗りつぶされたことにより、家族の一人ひとりが地に足がついているように感じられる。

① A子の描画

図1のSFDでは、A子は、両親の不仲が気になって、家族の方を見ているように思える。A子が口を大きく開けて笑顔で何かを語りかけているように見えるのは、Gillespie(1994)が述べているような自分の内なる敵意をごまかすために使われた笑顔の可能性もある。

図2のSFDでは、A子が正面を向いて立っている姿が描かれている。携帯メールを通して家族機能の修復がなされ、両親の心配をしないでいられる状態であることが描画の中に表出されていると考えられる。A子の足の向きは、図1においては左側の家族の方を向いていたが、図2においては、かがとをつけて左右に開いて描かれている。A子の心の状態が安定していることが伺える。

② 母親の描画

図1では、母親だけが目を閉じて描かれていた。これは、現実の辛い状態から逃避したいという思いの表れではないだろうか。それに対して、図2では、母親の目が開いた描画になっている。A子が母親は子どものために頑張っていると述べていることは、母親が二人の子どもの方に両手を広げているということからも解釈できる。母親の服装や髪が細やかに描かれていることからしても、母親の精神的に落ち着いた状態が推測される。

③ 弟の描画

図1の弟は顔も身体も正面を向き笑顔であったが、図2においては、困った表情をしている。それは、A子も述べているように、この時期に恋人との別れ、交通違反による処分など、あま

りいいことがなかった弟をイメージして描いた可能性がある。

④ 父親の描画

図1のSFDの父親は、顔は、右側の家族成員を向き、両目の瞳は、左側に寄っていて、家族成員の反対側を向いている。また、左右の手はズボンのポケットに入れ家族成員との関わりを拒否しているかのように感じられ、家族成員との心理的距離を感じさせる。父親は家族成員のことが気になるが、素直に自分の気持ちを出せずに葛藤している状態が描画に表出しているように思える。

それに対して、図2のSFDの父親は、身体と両目がやや家族成員の方を向いているようにみえる。図1で見られたようなポケットに手を入れ家族成員を拒否しているのではなく、左側の手はいつでも弟の方に伸ばせるように描かれている。人物の向きや姿勢は、その人物の家族への関わり方を意味する(日比, 1986)ので、父親と家族の間の心理的距離が縮まったと考えられる。

3. 総合的考察

A子の1年6ヶ月間の携帯メールによる両親とのコミュニケーションは、家族機能の修復に何らかのよい影響を及ぼしたと思われる。そして、家族機能の修復は、第1回の面接に描いたSFD(図1)と1年6ヶ月後の第3回の面接に描いたSFD(図2)を比較検討した結果、描画においてもよい変化がみられることが示唆された。よって、SFDを家族機能のアセスメントとして使用できる可能性が本事例より示唆されたのではないだろうか。

今後は、SFDは家族機能の一部をアセスメントできる可能性があるという認識で、事例を増やし、家族満足度尺度等とテストバッテリー

を組んで、多様な視点から家族理解を深めていく必要がある。

謝 辞

論文発表を快諾してくださったA子に心よりお礼を申し上げます。

【引用文献】

- 馬場史津 2005 母子画の基礎的・臨床的研究
北大路書房
- Harris, D.B. Children's drawing as measures of intellectual maturity. New York: Harcourt, Brace, & World, 1963
- 高橋依子 2008 描画法(小川俊樹編)現代エスプリ別冊 投影法の現在 164-174 至文堂
- 高橋依子 2008 投影法の現在 現代のエスプリ別冊 143-153 至文堂
- 杉浦京子・香月菜々子・鋤柄のぞみ 2006 投影描画法ガイドブック 山王出版
- 新藤, 相模, 田中 2002 小学生の「家族イメージ」に関する研究 家族心理学研究 第16巻 第2号 67-80
- 加藤孝正 1986 「動的家族画(KFD) 臨床描画研究I 89-91 金剛出版
- 江幡綾子・吉田昭久 2000 子どもの絵にみられる家庭内コミュニケーションの実態と心理的課題—動的家族画テスト(KFD)を通して— 茨城大学教育学部紀要 49号 95-115
- Gillespie, j. 1994 The Projective Use of Mother and Child Drawings: A manual for clinicians. New York: Brunner/Mazel.
- 松下恵美子・石川 元(訳) 2001 母子面の臨床応用—対象関係論と自己心理学— 金剛出版
- 日比裕泰 1986 動的家族描画法(K-F-D) 一家族画による人格理解— ナカニシヤ出版